
LINK

神坂澪決

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

LINK

【Nコード】

N0093BA

【作者名】

神坂漣決

【あらすじ】

高度な文明が発展した都市エルリアに起こる超常現象の数々。それを解決するために学園ヴァレイに設置されたクラスS。突如クラスSに振り分けられた水城テッペイとその仲間たちは果たして事件を解決することができるのか？数奇な運命に手繰り寄せられた者たちの戦いの物語が始まる

Epilogue

そこは戦場だった。

荒れ果てた大地が渴いた風の音が無数の骸がそれを物語っていた。

そして骸の丘に一人、精悍な顔つきをした青年が呟くのだ。

「マタ守レナカッタ…」

徐々に俺が自我を意識するにつれて、その風景は遠ざかっていく。

ジリリリ!!ジリリリ!!

「またあの夢か…」

貧弱そうな顔つきの青年がそう言って目を覚ますと、ベッドから起き上がり自分の部屋を後にする。

「うっ…おはよう母さん」

「おはよう、急がないと始業式遅れるわよ?」

「始業式は九時までに登校すればいいんだし大丈夫だよ」

そう言って青年が時計へと視線を移すと時計の針は八時半を指差していた

「あれ???」

「あれじゃないわ。早く学校行きなさい。始業式早々遅刻だなんて恥ずかしくて仕方ないわ」

「そうだな…それじゃ行ってくるよ!!」

言うなり青年は勢いよく家を飛び出した。

俺の名前はテツペイ。

水城テツペイだ。

この春から学園ヴァレイの二回生になる至って普通の学生だ。俺の住む都市エルリアは高度な科学が発展した世界有数の科学都市なんだ。

「ちよっ…ちよっとそこのエアキャブ待て待て!!」

エアキャブって言うのは空飛ぶバスみたいなやつだ。移動手段には欠かせない乗り物だ。

「ふーっ…ほんとに遅れるかと思った…」

「また飛び込み乗車かぁ。二回生になっても相変わらずだねテツペイ。」

「おお、ケイゴ!!おはよう!!」

嘲笑気味に俺に話しかけた少し背の小さい青年。俺の友達、多路ケイゴだ。

「今日は始業式だけじゃなくて、クラス分けもあるから楽しみだね。」

「そうだったな！いやあ…一回生の振り分け試験を思い出すな…」

「最下クラスのFクラスのままか、それともEクラスか、楽しみだね。」

「そうだな。おっ、そろそろ着くぞ。」

エアキャブがヴァレイの入口に近づくと勢いよく二人は飛び降りた。

「よつと！…相変わらず慣れないよなこの降り方。」

「それより早く行こう。ほらあそこ！！人が集まってるよ！！新しいクラス表だよ。」

そう言うなりクラス表に群がる生徒たちを押し退け二人は前へと身乗り出す。

「えーと…Fには…ない!？」

「おお！！やったね、Dに昇格だね!!」

「いや…ちょっと待て、Dにもいないけど俺たち…」

「ええ!?!なんで!?!まさか留年…?」

「そ…そんな訳ないだろ。ちゃんと証書だって届いてるし…」

クラス表を見直すが俺とケイゴの名前はない。念のため全てのクラ

スの座席表を慎重に見ると、なんとか俺とケイゴの名前が書いてあった。

「おいおいケイゴ、よく見てみる。俺たちの名前ならここに書いてあるって。」

俺が安堵の息を漏らすとその傍らでケイゴが不意をつかれたように目を疑わせていた。

「テツペイ…テツペイこそよく見てみなよこのクラス…」

そついやクラスを見るのを忘れていた。自分の座席表からクラス一覧へ目をやるとそこには…

「クラス…S…?」

クラスS…それは生徒たちの間で存在すら確かではないと言われている幻のクラスだ。教室すら知られずそのクラスに割り振られた生徒の姿を見ることが叶わない。都市伝説のようなクラスである。

「ほんとに実在してたのか…クラスS。てか教室は!?!どこ行きやいいんだよ!?!そもそも俺クラスSに行くような成績じゃねーよ!?!」

「噂だけどクラスSって成績とか関係ないらしいって聞いたことがあるよ。」

「ますますわからねえ…はあ、とりあえず体育館で始業式始まるから行こうぜ。」

とほとほと二人は体育館へ向かった。その後始業式は通常どおり執り行われ、終わりとともに生徒は新しいクラスへと向かっていった。

「おいおい…どうすりゃいいんだよ…」

「困ったね…」

二人が途方に暮れながら体育館に残っているといきなり体育館の入口のドアが閉まった。

バタンツ！！

「!?!?…誰だ!?!?…?…誰もいないのか?」

恐る恐る入口へ近づくと床から白いガスが噴き出してきた。

「うわっ…!!!…なんだこれ…意識が…とお…く」

「テツペイ!!…しっかり…!!…うう…俺も…」

床に臥せる二人。

突如襲い掛かる罠。

彼らの日常は少しずつ歪んでいく。誰にも気づかれることなく。不思議な運命に手繰り寄せられながら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0093ba/>

LINK

2011年12月31日03時49分発行